
特集「機能する印刷」によせて

松浦 要蔵

「機能する印刷」という表現は、3年ほど前に、研究開発本部の検討会の中で、リコーが今後、自信を持って社会に提供していける、また提供すべき価値は何か？という議論の中で生まれた。

ある人は「それでは今までリコーが創業以来取り組んできたのは、「表示する印刷」ということですね」と言われた。リコーという伝統的な会社が新たな事業を創造するにあたって、一つの考え方がある。それは、何をやるにしても、その根底にリコーの遺伝子ともいべき基盤技術が存在しなければ成功しない、という考え方である。基盤技術とは、リコーの過去の錚々たる技術者たちが自分の手でそれに触り、汗をかい、ある時は泥水を被りながら築き上げてきた歴史であり、地に足がついた、土地勘が働く技術のことであると思う。それが「表示する印刷」のための基盤技術群であり、そのようなリコーの過去の錚々たる技術者たちの声が聞こえない者に、リコーの未来を創ることは出来ないという考え方である。

そういう訳で、リコーが「表示する印刷」の未来形として「機能する印刷」に新たな事業を見出そうとすることは必然的であり、成功への正しい近道であると思う。また、そうであるならば今回特集された各テーマの技術者が本気になって成功を欲し、経営もそれにコミットするならば、今後数年以内で有力な事業の芽になるはずだと期待している。

有力な事業と言ったのは、電池印刷にしろ、バイオプリンティングにしろ、今後莫大な市場が約束されていることが明々白々だからだ。しかし言うまでもなく、今の時代において根底にリコーの基盤技術があるだけでは競争に勝てないし、今までにない新たな価値創造もあり得ない。世界中からリコーには出来ない革新的な技術を探し出し、協業することが必要である。バイオプリンティングは正にそういった道筋に入っている。

話は3年前に戻るが、「機能する印刷」と同様な考え方で、研究開発本部内で合意形成された、リコーが価値提供すべきものとして「知能（AI）を持つ目や耳の提供」がある。こちらは電池印刷やバイオプリンティングのような単一の莫大な市場ではないが、道路・トンネル橋梁・法面などの「インフラ点検」や「工作機械の振動分析」など今日的な社会や産業の重要課題解決にリコーらしく刺さって、きらりと光るものがあると思う。これらは技術者の本気度と事業部のコミット（頑張り）により、既に事業がスタートしており、やはり成功への近道という意味では正しいのではないだろうか。

さて「知能（AI）を持つ目や耳の提供」が深く関係する情報通信分野では、日本はGAFAなどに比して、大きく遅れをとった。3周以上の周回遅れであると思う。確か6、7年前にある著名な方がリコーの講習会で、既に日本はAMAZONから2周遅れであると言われていた。

ここ数年来、クラウド、AIを活用した所謂プラットフォームビジネスこそが新たな来るべきものであり、日本の大企業製造業も目を開いてそれに追従すべきという声を盛んに聞いた。それはそれで、今を生きるために必死で取り組まねばならないことだと思うが、既に「仏の手のひらで転がされている孫悟空」状態になっていることも否めない。

研究開発の皆さんはそのようなことも認識し、長期的なルール変更を目指すべきと思う。（「ルール変更」はお世話になった先輩が好んで使った言葉で、良い例え言葉だと思う）

確かに情報通信技術の進歩により、昨日まで出来なかったことが出来るようになり人々（の大半）は、より便利に楽になる、或いは便利に楽につながることに熱狂している。しかし便利さや楽さの価値提供による富の拡大・自己増殖は、大きな目で見れば産業革命以降何も変わっておらず、そろそろ人間社会的に限界に近づいているのでは？と疑い出す人々が現われてきても不思議ではない。科学技術に停滞は無いと思うが、今後の世界では便利さや楽さのために生きるのでない、それでは到底満足できないという人々がどんどん増えてくるかもしれない。AIや情報通信技術を駆使するとしても、従来の便利さ楽さという価値の反対側にあって、対立しつつ調和するような新たな価値について研究し、10年後、20年後の長期の事業化を探る観点も必要だと思う。

世界の最先端の知性はそのことに気づいて取り組み始めていると聞く。キーワードは「人文科学」であり、そこから得られる新たな価値とは、人間の歴史にとって単なる過去の蒸し返して、革新的なテクノロジーによる違った実現方法・表現方法に過ぎないのかも知れないが、「機能する印刷」から大きく話は飛んでしまったが、そのことで「機能する印刷」が担うべき短中期的な意味での重要性は何ら変わらないし、心からその成功を応援したい。

最後に、私が心を動かされる心理学者ユングの言葉を転記したい。

この言葉は人が自分の心の内面（深層）と向き合い、自意識を広げ、よって新たな自分の知らなかった自分（の存在価値・目的）を見出す道について述べている。これから現実の外の世界において、今までにない価値創造を目指す全ての技術者にとって、このような人間の根源的な心の内面に向かう個性化の道が、人生のある大転換点（それは若くして挫折した時かもしれないし、老年になってからかもしれない）からは希求されざるを得ないということを知っておいても損はないと思うので転記した。これをもってこころ静かに、筆を置きたいと思う。

（元 株式会社リコー 顧問）

模範に倣って生きる人に災い有れ！生はその人たちと共にはない。

あなたたちがある模範に倣って生きているならば、その模範の生を生きているのだ。

あなたたちが、あなたたち自身を生きていないのならば、いったい誰があなたたちの生を生きていることになるのだろうか？

だから、自分自身を生きなさい。

道しるべは倒れてしまい、行く先不明の道が私たちの前に横たわっている。

がつがつとして、知らない畑の果物を呑み込まないようにしなさい。

あなたたち自身が、自分に有益なもの全てを育てている豊かな畑であることを知らないのか？

だが誰が、永遠に実り豊かな魂の園への道を知っていようか？

あなたたちはその道を外的なことに求め、本を読み、意見を聞こうとする。
それが何の役に立とうか？
道は唯一つしかない。それはあなたたち一人ひとりの道である。
皆、自分の道を行きなさい。
掟を与えること、よりよいことを望むこと、より樂をしようとすることは誤りであり、
災いである。誰もが自分の道を求める。
道は共同体における相互的な愛につながっている。人々は自分たちの道の類似性と共通性を見出し、感じるようになるだろう。
共通の掟や教えは、人が個々の存在になることを強い、それによって望まれない共同体の圧力を逃れることになる。しかしながら個々の存在は、人々を互いにいがみ合い、憎しみ合わせることになる。
ゆえに、人間に尊厳を与え、個々の存在であらしめよう。
自分の共同体を見つけて、それを愛するために。

(カール・グスタフ・ユング)